

ぴーにやっつ

中村 龍介

毎年、お正月にはお節を作る。そのお節を目当てに訪ねてくる客人もいるのだが、年末の慌ただしさを考えると、些か負担になつてきた。無理もない。年が明ければ後期高齢者の仲間入りとなるのだ。偶にはゆつくり新年を迎えたい。

海の見える温泉がいいなあ。次女の淳子に話すと、彼女も同じ思いがあつたのか、二つ返事で私の提案に賛成した。

「年末のお宿」と入力してネット検索で調べてみた。十月だというのに、目ぼしい観光地はほとんど満室。一件、千葉県房総半島最南端の白浜に良さそうなホテルが見つかった。

離れて暮らしている娘たちやお節を期待している客人にも事前の了解を取り付けた。後は二匹のネコだが、一泊旅行なので少し多めにドライフードを置いておけば大丈夫。

大晦日の朝、出された大量のドライフードに訝しげな顔で見上げるネコどもを尻目に車で出発。

自宅から川崎に出てアクアライン経由で行けば木更津までは一時間足らず。その先も高速道路が整備されているので、途中の昼食休憩を入れても三時間ほどで房総白浜に着いた。

チェックインまで時間があるので、ホテルの駐車場に車を止め、少し周囲を散策してみた。

直ぐ近くに野島崎灯台がある。天気は快晴で、空は抜けるように青い。鮮やかに浮かび上がった白亜の灯台の上をトビだろうか、大きな鳥が数羽、輪を描いて飛んでいる。

風もなく大晦日とは思えない暖かさ。巨岩や奇岩に富んだ海岸を一時間ほど散策して、ホテルに入った。

「ホテル南海荘」は家族連れのお客がほとんどで、毎年ここに来るといふ常連客も少なくない。我々の部屋は六一六号室。広い部屋に四つのベッドがある。予約を入れた時、この部屋しか空いていなかった。

窓からの眺望が素晴らしい。眼前に広がる大海原は太平洋だ。左に目をやると、小さな岬がある。その中央には先ほどの灯台が格好のアクセントとなって存在感を見せている。

淳子は大喜びで、早速ベッドのひとつに大の字に倒れ込む。「来年もここに来ようよ。皆で来てもこの部屋に泊まれるよ」確かに、長女と末娘を連れてきてもこの部屋なら十分だろう。三女と夫君、それに孫二人は別の部屋をとれば、家族八人のファミリー・パーティーも出来そうだ。

夕刻、ゆつくりと温泉に浸かり、浴衣と半纏に着替えて、夕食に出向いた。

広い食堂には和洋バイキングの準備が整っていた。鮮魚が売りというだけあって、刺身の他にも、貝殻つきのハマグリ、アワビ、ホタテ、それに生のエビ、カニなどが魚屋の店先のように並ぶ。テーブルには小型の加熱器と焼き網が用意され、自分でグリルして食べる。天ぷら屋台やステーキコーナーもあって、揚げたて、焼きたてをいただくことができる。

御馳走に満腹して一旦部屋に戻った。小休止の後、ロビーに降りる。八時からは年末プログラムの一環としてホテルが主催する「ビンゴ大会」があるのだ。全員に賞品が当たるといので我々も参加した。

大勢の宿泊客に交じって、数字が表示される度に手にしたカードと見較べて一喜一憂。時折、客の中から「ビンゴ！」の声がかかる。三十分ほどで我々のビンゴも完成。

当たった賞品は殻付きピーナツの形をした猫の縫いぐるみ。その名は「ぴーにやつつ」。知らなかったが、千葉県のエルクキヤラらしい。シンプルなデザインだが、なかなか可愛い。話しかけると内部に組込まれたレコーダーが反応し、オウム返しに返事をする。淳子は大喜びでもっと大きなのを買いたいという。

夜も更けて深夜近く、今度は食堂で年越し蕎麦が振舞われる。縁起ものなので少し頂戴した。

翌朝、初日の出を期待して早く起きたが、残念ながら空はどんよりで、時折小雪が落ちてくる。ロビーに降りてみると、法被姿の若い衆が威勢よく交互に声をかけ合って、餅つきの最中。朝食にはつきたての餅が出るという。

お餅をつき終わるまでに初詣を済ませようと、前日灯台の近くに見つけた小さな神社に出向いた。寒空の下、初詣客の姿もちらほら。簡単にお参りを済ませて、ホテルに帰りその



足で食堂に急いだ。朝食がまた豪華。お節にお雑煮。湯気の立っているお餅もある。いつもは自分が味わうどころではないが、他人の作ったお節は美味しい。昨夜、あれだけ食べたのに、と我ながらあきれられるほど腹におさめた。雪になるといけないので、早めに帰ることにして、荷物を車に運んでチェックアウト。会計を済ませたところに淳子の小脇に大きなぴーにやつつを抱えて、売店から戻ってきた。「また来るからね」とスタッフに声をかけ車に乗り込む。帰りの道中、後部座席に鎮座しましたユルキヤラ君が背後から私の運転を見守っていた。さてさて、ネコどもがぴーにやつつにどんな反応を示すだろうか。

【二〇一五年一月記 原稿用紙五枚 課題「空」】